

学生たちの観た日本

大学名： 北京大学

氏 名： 何彦瑾

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本人は非常にマナーを大切にしている他人に対してはとても礼儀正しい。日本の家庭では一般的に食事の前には「いただきます」と言いお辞儀をする。日本の店員はお客さんに対しとても丁寧に挨拶をし、お客さんが店を離れる際は外まで送り手を振ってお別れをする。日本人は普段から敬語を多用し、他人に対する尊重を表現している。私がエレベーターで日本人と遭遇した時、彼らはいずれも私へ軽く会釈をし、日本人と同じタイミングで部屋へ入る時、彼らは私が先に入るように促した。日本では今日まで「高齢者を敬い子どもを大切にする、レディーファースト」との理念が提唱されていて、飛行機への搭乗の際は女性や子どもそして高齢者が先に搭乗し、成人男性は最後となっている。こうした点は正に日本人の他人への思いやりを表していると言える。

日本人はとても秩序がある。エスカレーターに乗る際、人々は左側に立ち、右側を急ぐ人用に空けている。チケットの購入や会計を待つ時もまた日本人は意識的に列に並ぶ。

日本人はとても親切で、すすんで人助けをする。企業訪問の際、スタッフはとても親切丁寧に自社の製品を紹介し、また社内を案内してくれた他、交流の際は私たちからの質問にも丁寧に答えてくれた。また私が行きたいコンビニを見つけられなかった時、ホテルの警備員がグーグルマップを使い目的地までのルートを詳しく教えてくれたこともあった。

今回の日本訪問では日本人の品性について深く知ることができた。マナーを大切にする、秩序を守る、すすんで人助けをするなどの日本人の特徴は日本を開放的で包容力のある国にしている。

大学名： 北京大学

氏 名： 高鈺萍

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

5.アニメなどのソフトパワー

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

時が過ぎるのは早いもので、8日間の日本訪問はまるで顕微鏡レンズで見た映画のように幕を下ろした。だがこの映画では生き生きとした場面や濃厚で強烈な色彩そして歴史や文化を間違いなく感じる事ができた。

日本人の思いやりや細やかなサービスには感動させられた。企業や大学またレストランや商店を問わず、触れあったすべての人はお客さんに対し丁寧な接客をしていた。日本で生活した数日間、この素晴らしい秩序やきれいな環境はとても落ち着くものであった。

日本の重厚な歴史文化にも驚かされた。100年以上の歴史を持つ企業、数百年ひいては千年の歴史を持つ建築物、精巧な寄木細工、奥ゆかしい茶道や座禅、上品で健康的な料理、快適な温泉及び沢山のアニメ作品などはいずれも私に落ち着きをもたらしてくれた。

日本の科学面の技術革新や研究開発能力はとても印象深かった。野菜や果物の新しい品種、高解像度の画像形

成・現像技術、最先端のステッパー・フォトリソ製造技術そして科学技術に関する難題解決能力の高さには感服させられた。

それと同時に、日本人の他人への礼儀正しさの中に多少の疎外感を感じた。必要が無ければ関わらず、静かに感情を抑制しているように見えるが、相手は実のところ孤立感を覚えている。その他、日本のホテルの外観は素晴らしいが、中国のホテルの客室と比べると設備のスマート化がやや足りないように感じた。だが野菜や果物の品種そして半導体や科学研究に関しては日本に学ぶべきだと思う。

今回の8日間の訪問はとても楽しい体験で微視的に日本を見ることができた。親切に接してくれたすべての人に感謝すると共に、体感した文化的違いを大切にしたいと思う。日本は旅の目的地である以上に心の宿場であり、一生の思い出を残してくれた。

大学名：北京大学

氏 名：黄彦皓

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

ここでは日本人のマナーの良さと思いやりについての個人的な意見を述べたいと思う。

まずマナーについて。日本はマナーを大切にしている国で、中国よりもそれを今日まで多く残しているもしくは日本人はより良くマナーを実践していると言える。例を挙げると、日本での数日間において最もよく耳にした言葉は「ありがとうございます」で、その次に「お手数をおかけします」又は「すみません」というものであった。これらは実のところ日常生活における些細な礼儀であり、一見非常に簡単な言葉だが、日本人はこれらを非常にうまく実践している。こうした人と人の間に礼儀を入れるとの付き合い方は人間関係における摩擦を大きく減らすことにつながると思う。もう1つ印象深かったのは、企業の従業員、ホストファミリー、大学の学生等とお別れをする際、彼らは私たちの乗るバスまで私たちを見送り、そして姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれたことであった。これは中国古代における十里先にある長亭まで見送るとの言葉と似たものがあり、私はとても心を打たれた。

思いやりについては、環境保護がその1つの典型だと思う。なぜなら環境は未来の子どもたちへの最良のプレゼントだからである。これについてはパナソニック、キヤノン、ホテルニューオータニ等が印象深かった。これらの企業の環境保護に関する社会的責任感は企業文化に浸透していると言える。既存の資源を可能な限りリサイクルするとの点については、例えば JAL では使い古したカーペットを格納庫で再利用している他、ホテルニューオータニでは廃水の中水処理、そして生ごみを堆肥処理している。エネルギー消費の改善との点については、例えば JAL の航空機ではカーボンファイバーを採用することで機体を軽量化し、エネルギー消費を大きく削減している。そして新エネルギーの開発利用との点については、例えば丸紅では新エネルギー産業を模索している他、パナソニックでは水素エネルギーの開発と利用、特に真の商業利用への試みを行っている。

もう1つの典型としては企業による製品への人に優しいカスタマイズである。この点についてはパナソニックが最も明らかで、またキヤノンの企業文化にも直接体现されている。自分が職人であることを常に肝に銘じ、企業の使命は人々の求めるものに着眼し人々の生活を改善することにあるとの点から、パナソニックは家電製品への改良を続け、人々の求めるものを世に送り出してきた。キヤノンについても同様で、核磁気共鳴装置を例にすると、核磁気共鳴のプロセスにおける騒音は一般的に人に大きな苦痛を与えるため、患者にとっては心身両面の試練となるが、キヤノンの核磁気共鳴装置は深層学習等の技術により騒音を最大限抑えており、クリアな分析画像を表示すると同時に、患者の苦痛を軽減している。その他、患者用の枕があり、患者の目の前のパネルにはユニークな映像が表示される。こうしたすべての点は科学技術により人々の体験を改善するものである。

大学名：北京大学

氏 名：許可為

テーマ：6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

企業見学では日本企業のエネルギー分野における取り組みや技術革新について理解を深めることができた。そしてこれらは将来的に中国におけるエネルギー需要や発展の方向性に大きな影響をもたらすかもしれないと思った。

電気製品企業であるパナソニックのエネルギー貯蔵及びユーザー側のエネルギー利用に関する研究や取り組みはとて注目すべきもので、特にパナソニックはテスラと共同で駆動用バッテリーを開発しており、これは電気自動車やエネルギー貯蔵システムに関し大きな進展が得られたことを意味している。日本及び中国で実施されている水素エネルギー分野の研究や水素電力貯蔵システムの建設及びコンビニのエネルギー管理におけるイノベーションはパナソニックのユーザーニーズに関する進んだ取り組みを示している。これらの取り組みは将来的なエネルギー転換の模索やエネルギー利用モデルの転換に新たな考え方や可能性を提供するものである。

総合商社である丸紅は従来型エネルギーそして新エネルギー分野に携わっている。新エネルギー分野は大きく発展しているものの、発展途上国にとっては従来型の化石エネルギーは依然として重要な支柱的存在であると丸紅は認識しており、従来型エネルギーの貿易事業も大きく展開している。それと同時に、ESG（環境、社会及び企業統治）への重視により、丸紅はCCUS（二酸化炭素回収・有効利用・貯留）等のカーボンニュートラル関連技術への投資を始めている。CCUS技術の運用は、発電業界における炭素の排出削減及び従来型エネルギーの外部コスト抑制につながり、環境保護及びエネルギーの持続可能な発展にとって大きな意味合いを持っている。

ホテルニューオータニでは自家発電装置により電力の一部を賄っている。こうした自給自足の手法はエネルギーの利用効率を高めるだけでなく、エネルギーの伝送における損失を減らすもので、実際のビジネスモデルにおける省エネ排出削減の成功事例を示している。またホテルニューオータニでは生ごみの堆肥処理による再利用を行っており、契約農家に肥料を提供し、収穫された農作物をホテルが買い取ることで資源のリサイクルを実現している。

以上から、エネルギー分野における日本企業の取り組みや技術の進展は、中国の将来的なエネルギー需要や発展に重要なヒント及びインスピレーションを与えてくれている。これらの技術革新はエネルギー業界における将来的な発展の方向性に関わるだけでなく、世界的なエネルギーの枠組みにも大きな影響を及ぼし、エネルギー業界をこれまで以上に持続可能な環境に優しい方向へと転換するものである。

大学名：北京大学

氏 名：吳天可

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

歴史的に日本文化は中国の伝統的な儒教の影響を強く受けており、一部の階級制の概念は人々に深く根付き、生活の様々な部分に表れている。日本では古くより天皇、将軍、大名、武士そして各貴族階級といった封建制度が存在しており、階級制の概念は社会構造や法律にも体现されている。この点は日本の言語からも窺い知ることができ、日本語には多くの敬語や謙譲語が存在している。先輩と後輩、上司と部下、教師と生徒との間で会話をする際にはそれぞれの言葉遣いがあり、互いのお辞儀等の礼儀の度合もそれぞれ異なる。これは階級制思想の表れであり、また日本人の「適材適所」思想の表れでもある。

今回の日本訪問では私自身もそうした点を感じた。中国と同じように日本の上下関係もまた明確であり、決まった行

動基準が存在する。日本では終身雇用が一般的であり、日本人としては社内において先輩や上司に従いしっかりと仕事をし、昇進を目指すことは当たり前のことになっている。また中国の大学では講義の際に教師と学生が交流することは少なく、これは中国において古くから存在する「天地君親師（天地への感謝、目上の人への尊重）」との思想に関係していると思われるが、今回日本の学生との交流を通じて、日本でもこうした現象が同様に存在していることが分かった。

日本の国民性を研究した著書『菊と刀』では、日本人は菊のような穏やかさと刀のような鋭さを兼ね備えているとしている。今回の日本訪問においては私自身もそうした点を感じることができた。日本人はとても礼儀正しく、お互いのあいさつは丁寧で心温まる思いがするが、だからと言ってつまり日本人は穏やかだと決めつけることはできず、日本人はそれと同時にまた目標に対しひたむきであり、決意に満ちていて、1つの物事をやると決めたら揺るがずにやり遂げる。そして絶えず進歩を求め、極めようとする。こうした点は日本の工業製品が世界的に人気を博している理由の1つだと思う。

以上から、今回の日本訪問を通じて私は身をもって日本の国民性や日本人のマナーについて理解を深めることができた。

大学名：中国人民大学

氏 名：張逸凡

テーマ：4.日中間の交流

2つの大学の学生との交流において私は近年の日中間の交流が日増しに緊密になっていると感じた。この点については、私たちが常に積極的にまた自発的に日本へ友好のオリーブの枝を差し出し、中国の青少年や学生らは日本について一定の理解をすると共にさらに日本の言葉や文化などについて学んでいると日記にも記した通りである。そして今回の理論を超えた学習、実際に日本の学生と面と向かった交流により私たちは、海を隔てたこの土地の人々もまた私たちと同様に対岸の世界や国への知識欲と好奇心に満ちていることを知った。日本人も同様に言語、文字、芸術、美食、建築、社会等中国に関するすべてを探求しており、毎年一定数の日本人学生が交流や訪問、交換留学に中国を訪れ、中国で見聞きし感じたことを日本に持ち帰り、新時代における中国への新たな印象を形成している。彼らは微信やTikTokを使うことができるだけでなく、「科目三」も知っていた。またアル化の発音ができる他、中国人と同じようにお酒をすすめ、『我愛北京天安門』も歌うことができていた。これらすべてが両国のイメージを代表する若者が互いに理解し、探求し、尊重し、交流していることの最良の証拠であり、これこそが本当の意味での「交流」だと言える。ホストファミリーや私たちと交流した日本企業の従業員もまた私たちとの語らいの中で、中国や中国社会そして中国人についての理解や認識を深め、その中ではこれまでの中国に対する古い印象が変わった人もいるなど、中国で長期間生活、学習、仕事をしている中国人との交流を通じて、本当の新時代の中国そして現在の中国を垣間見ていた。私たちも同様に多くの収穫があり、身をもって日本の風土と人情を感じ、日本や日本社会そして日本人について「再認識」するなど、本当の日本を目にすることができた。これこそが今回の活動の持つ最大の意義だと思う。

大学名：中国人民大学

氏 名：周薇

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

今回、日本企業の見学において私たちは多くの日本企業の従業員と交流し、彼らの実務経験や彼ら自身の現在の仕事への見解を知ることができた。その中で個人的に最も印象深かったのは企業への「忠誠」という点である。

それは従業員の企業での勤務年数に表れている。私たちが交流した従業員のほとんどが大学を卒業してからずっとその企業で働いていた。日本人自身が軽々しく会社を辞めないというだけでなく、会社もまた軽々しく従業員を解雇しない。会社は彼ら従業員にとってもう1つの家とも言える存在であり、長い期間を共にする。1つの会社で30～40年勤務することは日本人にとって非常にありふれた事である。

その他、従業員の多くは会社を自分の理想を実現するための場所としている。彼らは社内で可能な限り自身の生きがいを見出しており、この点は彼らに会社への特別な感情を抱かせ、進んで会社のために貢献した奮闘することにつながる。例えば三井住友銀行を訪問した際、ある従業員はここでの勤務により自身が大学で学んだ中国語を実際に活用するとの目標が実現できているとし、またその点が三井住友銀行で30年勤務を続けたい理由の1つにもなっているとのことであった。

こうした会社への強い帰属感は会社に多くの実質的利益をもたらす、社会において不安を抱える従業員に集団帰属意識による安心感をもたらす。だがこうした強い帰属感是一种の束縛でもあり、従業員が固定的であることは新たな活力が入りにくくなることにもつながる。

大学名：中国人民大学

氏 名：範余芸舒

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

ひと月前、初めて西島さんからメールを受け取った時、私は内心少し慌てていた。なぜならこれまで日本語で実用文を書くことを避けていたためである。繁雑な尊敬語、複雑な構文は私が3日後に「のんびりと」返信をした理由となった。用事が片付き、十分な睡眠がとれた日の午後、私はパソコンを開き海の向こうのホストファミリーはどういった人なのかについて中国式の脳で「推測」を始めた。

その後何度か連絡を取り合う中でも私は変わらず堅い文章を使っていたが、西島さんから毎回届く気軽でセンスある文章は私の文章の堅苦しさをより際立たせていた。

時計の針が進むにつれ早くなる鼓動、話題が無くて気まずい空気から感じる窮屈さ、これらは私がホームステイに対して抱いていた想像だった。そうしてホテルのロビーで座っていたところ、私の名前が呼ばれるのを耳にし、顔をあげるとそこには西島さん一家の姿があった。

西島さん一家は穏やかで親しみやすく、電車に乗る前の段階ですでに私の不安は完全に消えていた。彼らはユニークな話題が尽きず、知っているか否かを問わず、常に安心できる反応を返してくれた。

西島さんは船舶関連の仕事に従事しており、数年前までは日夜海上で業務をしていた。西島夫人は1990年代末に初めて世界一周旅行をした。西島さんの娘さんは元気で礼儀正しく、笑うと白い歯が見えるおしゃれな女の子であった。西島夫人から旅行時のアルバムを見せてもらったが、沢山の写真の縁のわずかな汚れは当時の黄金時代の光がタイムスリップし現代にやって来たかのようであった。そして時間や地理そして言語を超越した写真を堪能した後は数時間のおしゃべりを楽しんだ。

2日目を迎えると、私は西島さん一家と古い友人のようにとても親しくなっていた。最も感動したのは、前日にアルバムを見ておしゃべりした際に話題に出た北海道のチョコレートや文房具そして自分の父親へ贈るシェーバーなどを彼らはすべて覚えていて、わざわざそれらについて調べた後、私を連れて順番に北海道の特産品店、文具店そして電器店を回ってくれた他、文具店で私が欲しいと口にした手帳が、西島さん一家が私に買ってあげなければと横浜から

渋谷までの移動の間ずっと気に掛ける存在となっていたことである。

渋谷のドン・キホーテでは一蘭のインスタントラーメンが売られていたが価格が想定以上だったためそこで買うのは諦めたが、その後すぐ西島さん一家は私を一蘭ラーメンの専門店で連れて行ってくれた。これには驚かされたがとても嬉しかった。

彼らが見落とさず私のためにしてくれた事の1つひとつは西島さん一家の細やかで行き届いた思いやりであり、私に思いもよらなかった喜びをもたらしてくれた。

大学名：中国人民大学

氏 名：陳新宇

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本に来てとても印象深かったのは、マナーがとても良く他人を思いやっているという点であった。例えばエレベーターに乗っている際、日本人は一般的にエレベーターに乗り込んでくる人に笑顔で会釈をし、エレベーターを降りる際はボタン近くの人がすすんで手でドアを押さえ他の人が降りられるようにする。秋葉原においても、目が合った人に笑顔で会釈し、中には「こんにちは」と言う人も目にした。こうした行為については個人的には礼儀正しすぎるのではないかと思うこともあり、例えば目が合っただけであいさつされると私のようなコミュ障は慌ててしまう。だが気持ち的には、たとえ慌てたとしても中国でマナーを守らない人に遭遇するよりは遥かにましだと思う。中国では、マナーを守らないことの方が重視されることもある。例えば幼い頃に列に並んでいたことでマナーを守らない人に先を越されるとの経験から、列に並ばず先を争うように親に教育されるケースがとても多い。

また中国との大きな違いで言えば、日本の地下鉄駅構内などにエスカレーターがある場合、必ず左側に立ち右側を急ぐ人用に空けているという場面を目にする。そして電車を待つ際は人の多寡を問わず皆が自発的に2列に並ぶ。そのため日本ではたとえ人が多い時でも北京のような雑然とした感覚がなく、快適に交通機関を利用することができた。

秋葉原にいる時に他の団員からとあるエピソードを聞いた。それは、書店でとあるフィルム包装された本の内容について尋ねたところ、店員は直接そのフィルムを外して中身を見せてくれた。とても申し訳なく思った彼女はその本を買いたいと申し出たところ、店員は新たにフィルム包装された新品の本と交換してくれた、というものであった。秋葉原でのショッピングでは私自身もお店の接客がとても丁寧だと思った。この点は仕事上のニーズから生まれるのかもしれないが、こうしたお客さんを第一にするとのプロ意識だけで私は十分素晴らしいと思った。勤務時間以外においても他人からの求めに常に応じることを要求するのは非現実的であり、日本人が勤務時間外に他人の求めに応じることができなかったとしても、それを理由に勤務時における態度の良さを偽善と見なすことはできない。また三井住友銀行においては日本の銀行員は自身の利益のために顧客に不要な利息を負担させることはまずなく、常に顧客を第一としたサービスを心掛けていることを知った。かつて『半沢直樹』というドラマを見ていたことから日本の銀行に対してやや偏見があったが、現在では『半沢直樹』に出てくる銀行の環境は様々な摩擦を集約することで物語を進展させる条件となっているに過ぎず、半沢直樹自身は日本人が理想とする1人の銀行員又は店員が備えるべき素養を一身に集めた理想的な人物であると言える、と思うようになった。

大学名：中国人民大学

氏 名：張寧

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

今回の日本訪問で最も印象深かったのは日本人のマナーであった。これまで日本語を学ぶ中で、日本語において相対的に複雑な敬語や日本人のマナーについてはある程度把握していたが、実際に日本を訪れてから日本人のマナーの良さがこれほどとは思ってもよらず、私のこれまでの印象が一新された。ホテルでの宿泊や食事、企業訪問やショッピングを問わず、対応してくれた人は皆とても礼儀正しく、暖かな歓迎のあいさつの他、1人ひとりに丁寧な対応をしていた。訪問先の企業を離れる際は従業員の皆さんが外まで私たちを見送り、姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。彼らのお別れの際のこうしたマナーに私はとても感動し、毎回のお別れがより名残惜しく感じた。その他、ホームステイでは彼らのマナーへのこだわりについてより強く感じた。言葉遣いや人との距離感などがいずれも丁度良く、近すぎたり遠すぎたりすることがなかった。

特に会話の際に私が話したことを彼らは覚えていて、私の要望に基づいてスケジュールを調整してくれた。例えば、初日に初めて顔を合わせた後、私が日本について興味を持っている点や日本語を学ぶきっかけについて話したところ、日本のアイドルが好きだったことで私が日本語を学び始めたことを知った彼らはすぐさま2日目に原宿に行こうと提案してくれた。また道すがら、私が買いたい雑誌があるが見つからないと言ったところ、彼らは特にそれを気に留めてくれて、夜の外出の際にわざわざ書店を探し、私が本を買う間も待っていてくれた。

今回の数日間の旅において私たちは沢山の場所に出向き、沢山のひとと出会った。その中では店員そして交流した人を問わず、彼らの礼儀正しさのおかげで私は心が温まり、とても良い体験ができた。

大学名：北京外国語大学

氏名：高聡昊

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

近年、アニメに関して最もよく耳にする言葉は「中国アニメの台頭」である。1980～90年代生まれの人が次第に主要な生産・消費者層になり、彼らの成長と共に歩んできたアニメはすでに子どもだけが見るものではなくなっている。中国アニメは現在着実に進歩しているが、技術が確立していない、専門スタッフが不足している、資金の投入バランスが悪い等の問題は依然として解決が待たれている。そのため、アニメ産業がとても発達している日本から学ぶことは特に重要だと言える。私自身も日本のアニメにとっても興味があることから、今回の日本訪問との貴重な機会を借りてアニメ文化がとても栄えている秋葉原を訪れ、日本のアニメ文化について探ることにした。

1980年代に日本のアニメは飛躍的に発展し、その後も発展を続ける中で世界的に名高い多くの作品を生み出している。日本を訪れ実際にその文化を体験した私は改めてそれを認識すると共に、日本のアニメが成功した5つの要因について自分なりに総括してみた。

1. アニメは日本で100年の歴史があり、一定の視聴者層を有している。日本人のほとんどがアニメに触れたことがあり、社会の発展に伴い知らず知らずのうちに各世代の人々を感化している。
2. アニメ作家と消費者の間で良好な意思疎通ができています。掲載の後に反響が良くない場合、作家はすぐに内容を修正する他、場合によっては掲載を止めるなど、消費者の意向を非常に気に掛けている。
3. 日本のアニメはカテゴリーが豊富で、青少年や成人等様々な年齢層向けにコンテンツを提供している。中国のアニメのカテゴリーが単一的なのに比べ、日本のアニメは多くの選択肢を与えており、より多くの消費者を惹きつけている。
4. 日本のアニメの販路は、一般的な書店から各種テーマパークそしてコラボ販売までとても幅広く、ブランドの育成や知的財産権保護に非常に役立っていると言える。日本のアニメと世界的ブランドとのコラボ、さらに各国におけ

るコスプレブームもまた世界における日本のアニメの影響力の高さとアニメ制作の成功を物語っている。

5. 日本のアニメの画風はとても豊富そして綺麗で、物語の進行にも無駄がなく、斬新で、現実在即して、若者の心理的ニーズと美意識を満たしている。

日本は自国のアニメの世界的な人気により日本文化を黙々と発信しており、アニメを通じ日本の新たなイメージを構築することで各国の人々を惹きつけている。さらにより奥深い歴史や文化も交えることで、そうした日本の歴史や文化を綺麗にパッケージし、各国の人々に紹介している。

大学名：北京外国語大学

氏 名：姜子洋

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

4. 日中間の交流

キヤノン、パナソニック、三井住友銀行等の日本企業の見学において特に印象深かったのは日本の各企業の社会的責任感、国への使命感そして従業員の集団帰属意識であった。ほとんどすべての日本企業は社会と密接な関係を有しており、自社の発展を促進すると同時に社会的責任を全うし、環境保全の理念を深く研究するなど人類の持続可能な発展に貢献している。また、現在大部分の日本企業では依然として年功序列の雇用制度を継続していることから、日本人の多くは依然として同じ企業で長期間働いており、こうした制度のおかげで日本企業の従業員の多くは強い集団帰属意識を有しているのだと思う。私のホストファミリーはテルモに勤めており、彼らとの交流の際、コロナ禍の初期の頃、中国の企業と自社が互いにマスク等の感染予防物資を贈り合い共に厳しい時期を乗り越えたことにとっても心を打たれたといった話があった。自分が所属するグループに自分を組み入れ、グループと共に生き運命を共にする、両国のグループ間の支え合いを自身への手助けと認識し、自身の所属するグループを人生において重要なものと見なす、こうした点もまた一種の集団帰属意識の表れだと言える。

今回の交流活動において私たちは日本企業の従業員の家庭にお邪魔し、彼らと忘れ難い2日間を共にした。今学期私は日本語学院の社会研究の授業で茶道文化を選択していて、その中で「一期一会」は日本の茶道文化が体現する重要な要素であり、茶道を学び始めた頃に先生からは人生における毎回の出会いを最後の出会いと見なし、人と人との関係を大切に、毎回の出会いを大切にすることが「一期一会」の中核的理念であるとの話があった。今回のホームステイにおいて私は改めて「一期一会」について感じる事ができた。日本と中国の人々は異なる国で生活しているが、貴重な機会を通じて出会い、共に忘れ難い時間を共にしている。中国と日本の関係もまた同じであり、これまで何度も中日両国の人々の「一期一会」により両国の人々が互いの出会いを大切に、真心で交流することで共に両国の美しい情を築き上げてきた。日本語を学び始めた当初、先生からは日中両国の交流は数百年前から始まりこれまで途絶えていないとの話があった。中日両国の友好交流における基礎は民間に、未来は青年という使者にある。私は日本語を学ぶ学生として自身の使命を全うし、自身の能力をこれからも高め、中日両国の友好交流における懸け橋になりたいと思っている。中日両国の人々が友好関係を末永く継続できることを願っている。

大学名：北京外国語大学

氏 名：邱悦嘉

テーマ：5. アニメなどのソフトパワー

今回の「走近日企・感受日本」活動ではありがたいことに日本を訪れる機会を頂き、企業での見学や交流そして文化的聖地への観光が合わさった活動を通して多くの収穫を得ることができた。このところ日本経済は回復傾向にあり、また世界の国々からの観光客もひっきりなしに訪れるなど日本の観光業に新たな活力をもたらしている。こうした背景の下、日本はアジアの文化的シンボルの1つとなっている。日本の観光業は細やかなサービスと独特の文化体験で知られる。以下では日本の観光業による伝統文化に関するソフトパワーの推進について私が目にした点を紹介していく。

日本の古都である京都は豊富な歴史文化と伝統を有しており、多くの観光客を惹きつけている。私たちは今回京都の高台寺において茶道と座禅を体験した。時間こそ長くはなかったものの、それでも私たちは京都の魅力を窺い知ることができた。京都の観光業の発展はその巧みで十分なPR戦略を抜きに語ることができない。観光の際に私は、京都は有形文化と無形文化を巧みに融合し、様々な手段によりその独特な文化的特色をPRしており、悠久の歴史と豊富な文化や伝統をセールスポイントとし、日本文化の心としての地位を強調し、古い神社や寺院及び茶道や着物体験等の伝統的な文化活動を際立たせていることに気が付いた。また、京都の観光面のPRにおいては文化的シンボルの構築と発信を重視しており、その地名を聞いた人々が「神社」、「紅葉」、「浴衣」、「茶道」、「禅」等の象徴的シンボルを連想できるようにしている。そして有形の文化遺産から無形の伝統的風習に至るまで、京都は巧みに様々な要素を融合することで観光客が五官すべてで自然の景色を堪能し古典文化を体験できるようにしている。京都の古都としての姿はこうしたシンボルの構築や雰囲気の下でより強く表現され、印象深いものとなっている。

首都東京では各繁華街にある観光案内所が観光客への観光案内を提供しており、その機能については情報提供や観光案内に止まらず、現地の伝統文化の発展を支えるとの積極的な役割も担っている。個人的に印象深かったのは日本橋近くの観光案内所では詳細な観光情報を提供していた他、一部の老舗（和紙や陶器の店舗）の商品も陳列していたことである。これらの老舗は悠久の歴史があり、賑わう都内のあちこちに点在しており、普段はあまり目立たないが、観光客がそうした商品に興味がある場合、綺麗な和服を着たスタッフがその店舗の詳細な位置情報を提供し観光客が現地に向かえるようにしている。こうした手法は伝統工芸を重視しまた保護するものであり、現代的な都市において伝統文化を依然としてまぶしく輝かせている。

それと同時に、東京駅周辺のインフラもまた印象深かった。駅からはショッピングセンターや商店街につながっており、食事や娯楽といった一貫サービスなど観光客に多くの選択肢を提供している。こうしたワンストップサービスは観光客に利便性を提供するだけでなく、観光体験も高めている。もちろん複雑な交通網を把握すること自体が観光客にとってはとても大きな問題となっており、より簡単で効果的な表示方法で観光客が各車両のタイプを見分けられ、目的地到着のための最適ルートが見つけられるようにすることも必要である。

全体として、日本の観光業はその独特なPR戦略及び豊富なインフラにより多くの成果を挙げており、文化の継承において日本の観光業が形成した大きな特徴のある文化的シンボルを私は強く感じる事ができた。主導的地位にある観光業は文化と現代産業の融合を促進することで、文化に新たな命をもたらしている。優れた観光商品、美しくやさしい環境もまた人々のセンス、品格そして都市のイメージを高めている。

大学名：北京外国語大学

氏 名：張嘉桐

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

企業の側面から言えば、企業の社会的責任感や国への使命感は思いやりにおける最高の境地だと思う。私たちは今回、日本航空、パナソニック、三井住友銀行、丸紅、キヤノン、ホテルニューオータニとの6つの企業を訪問したが、

ほぼすべての企業では各企業の持続可能な発展に関する戦略及び環境保護に向けた発展計画について重点的な紹介をしていた。こうした点から日本企業は自身の収益のみならず、それ以上に社会そして人類の発展を考慮していることが分かる。細かな部分から見ると、ホテルニューオータニでは不慮の事態が発生した際の照明や給水を確保するための独自のシステムを開発している。また三井住友銀行では顧客の金銭的負担を軽減するため、必須ではないローンについては提案しないなど、こうした点はいずれも思いやりの表れだと言える。

日常生活の側面から言えば、礼儀正しさは余すところなく表れている。日本人は頻繁にお辞儀をし、「すみません」という言葉をいつも口にしてしている。彼らは何かをする際に常に他人に迷惑をかけないことを念頭にしている。そのため、他人の傍を通る時や何かを使う時は常に先にお詫びをする。それ自体は簡単な動作や言葉だが、そうすることでいざこざが起きる可能性が大きく減り、皆の心をより穏やかにしている。

今回の活動では大阪大学や早稲田大学の学生との交流の他、ホストファミリーとの交流をすることができたが、日本人は中国人及び中国の風習や文化にとっても興味を持っていると感じた。早稲田大学において私と交流した学生は中国の時代劇がとても好きで、中国の俳優に関しては私よりも詳しく知っていた。また私のホストファミリーは中国の茶文化にとっても関心があり、これまで多くの中国の茶葉を買っている他、さらに中国の茶器一式そして中国語で書かれた茶文化の解説本も買っていて、これから中国語を学ぶことで解説本の内容を理解したいとのことで、私はとても驚かされた。その他、交流を通じて知ることができた両国の違いもまた私たちの日本への興味を引くと同時に私たちの視野と思考を広げてくれた。例えば三井住友銀行では従業員が入社後に統一的な研修を受ける他、入社希望者の創造力と想像力を重視しているとの話があった。こうした点は、現在私たちは学習成績に拘りすぎていて様々な面から自身を高めることを疎かにしているのではないかということを改めて考えさせるものであった。

中日両国には相違点が多く存在するが、こうした相違点は正に両国の人々が交流をしていく上でのベースである。私たち皆がこうした相違点から日本を理解すると同時に、日本の皆さんへありのままの中国を紹介できることを願っている。

大学名：北京外国語大学

氏 名：黄宇彤

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

日本では、1つひとつの街がそれぞれ独自の個性を持っていることが感じられたが、歴史と文化的要素に満ちた京都ではそれがより強く感じられた。私の旅は京都に到着したところから始まったが、到着したその瞬間からタイムトンネルを通り優美で静かな世界に入ったかのようであった。

京都に到着し私たちはバスでこの古都を遊覧した。移動中、窓の外の景色は古い絵画のように見えた。穏やかな日本庭園、長い歴史を持つ寺院そして静かな街並みなど、こうした景色に私は自分が伝統的な日本の絵巻物の世界に入ったかのように思えた。通りかかった街中のあちらこちらで私は着物を着た日本人に注目した。ショッピングや散策をしている着物を着た女性は満開の花のようで、この街に独特の風情をもたらしていた。きらびやかな着物、長い歴史のある染色技術などはいずれも伝統文化の香りを生み出し、日本人の伝統への重視を形作っていた。

京都は茶道の発祥地で、また茶道文化の本場である。私はここで本当の茶道を体験することにした。静かな茶庵で茶道の先生はゆったりとした優雅な所作で私たちに香り高い抹茶をふるまってくれた。その所作は舞踊のようで、この芸術への理解の深さが表現されていた。茶室に座ると、外界と離れ一杯の茶と落ち着きだけが存在するかのような心の中の静けさを感じた。

次いで、私たちは座禅を体験した。これは日本文化の真髄を感じられるもう1つの方式である。座布団に座り目を閉じて呼吸に集中すると禅定の心が感じられ、世界全体が静寂に包まれているかのようであった。この瞬間、私は禅

宗の思想における心の中の静けさへの迫及及び日本人の静けさを尊重するとの生活ぶりを感じることができた。

秋の京都では一面の紅葉は見逃せないものである。庭園を散策していると燃えるような紅葉が日の光の下で輝いていた。この一面の紅葉の海原、そして一枚一枚の葉が色とりどりに街全体に神秘的なベールをかけているようであった。古い寺院では紅葉と建造物が互いを引き立て合い、大きくて静かな絵巻物を形作っていた。こうした複雑な融合に私は自身が外界と離れたタイムトンネルに身を置いているように感じられ、日本の伝統文化の奥深さを知ることができた。

京都におけるこうした様々な瞬間は、貴重な琥珀のようで、時間が止まっているかのようにであった。細かな部分から見た京都の旅では日本独自の文化を感じることができただけでなく、生活における些細な部分をもたらす素晴らしさ及び自然や歴史への畏敬の心を感じることができた。ここは伝統的な博物館であり、また現代的都市の縮図でもあった。歴史のある現代的なこの京都において、私は心を落ち着けて体感できる場所を見つけた。時間が止まったかのようなこの場所では、今回の旅の素晴らしさをより深く味わうことができた。

大学名：中国石油大学

氏 名：聶曉宇

テーマ：1.国民性についての理解

まず初めに、中国の隣国である日本には中国が学ぶべき点が沢山ある。公共の場での秩序を例にすると、日本では皆がルールを守り自発的に左側（中国は右側）を歩く。対して中国では多くの人にこうした意識がない。だがもし皆がルールを守ることができれば、実際には往来の人々の衝突が減り、事故の発生を大きく減らすことができることが分かる。また歩行の際、片側を急ぐ人用に空けるなど、外出における問題を大きく緩和している。

次に、礼儀については昔からすでに日本の国民に浸透している。いかなる時でも「おはようございます」、「ありがとうございます」といった言葉を皆が使っており、互いに尊重し合う態度は一種の親近感をもたらしている。

だが日本では自国の文化がそれほど浸透していないように感じた。洋式の食事、冷たい水を飲む習慣、1ヵ月前から始まるクリスマスの準備、さらに一面の片仮名表記による外来語のメニューなど、こうした点については日本の良くない部分だと思っている。東京国立博物館に行ったが、見学している人の多くは外国人で、日本人がいたとしても、じつくりと見学せずにそそくさと通り、解説すら興味がない様子であった。

良い部分もあればそうでない部分もある。私自身も客観的にまた論証的に日本を見て、自分自身の考えや理解を充実させたいと思う。

大学名：中国石油大学

氏 名：柴穎

テーマ：1.国民性についての理解

分析結果は次のとおりである。

1. 集団主義と社会的圧力：日本文化では集団主義が重視されており、チームワークと集団の利益に重きを置いている。個人の成功と失敗は往々にして集団と関連付けられ、こうした点もまた高い社会的圧力と仕事への貢献度合いにつながっている。日本人は常々、家庭や学校そして職場からルールを守る、優れた成績を追求するそして職責を果たすといったプレッシャーを受け続けている。

2. 教育と価値観：教育は日本社会において重要な役割を果たしており、日本人の価値観や行動パターンを構築している。伝統的な道德教育、規律訓練及び努力や自制を重視する等の価値観は日本人に深く浸透している。教育の重視と知識の追求は日本の国民性における大きな特徴の1つである。
3. 尊重と礼儀：日本文化では他人への尊重と社会秩序の維持が重視されている。礼儀正しさと謙虚さは美德と見なされ、日常生活のあらゆる面に示されている。先輩や上司または赤の他人を問わず、日本人は皆尊重と思いやりを示す。礼儀とマナーは日本社会において重要な地位を占めており、テーブルマナーや名刺交換等の面に体现されている。
4. 卓越さの追求と向上：日本人は卓越さの追求と常に改善をするとの精神を強く信奉している。仕事や芸術またはその他の分野を問わず、彼らは完璧を追求すると共に弛まぬ努力と反省により自身の技能とパフォーマンスを高めている。
5. 節制と社会秩序：日本社会は節制と社会秩序の重要性を重視している。こうした点は法律法規の遵守、社会規範への準拠及び公共秩序の維持といった行為に体现されている。個人の行為は一般的に社会的期待や世論の影響を受けていることから、日本人は一般的に慎重で衝突を避ける傾向との特徴を示している。

大学名：中国石油大学

氏 名：黄祺智

テーマ：1.国民性についての理解

俗に言う国民性とは即ちその民族の心理における文化の蓄積により最終的に形成される一般的な心理－行動パターンであり、1つの国の大部分の国民の状態を代表する性質で、英語では national character と言う。私が日本の国民性について言うならば、それは物のあわれと隠忍である。

「物のあわれ」と言う概念は、江戸時代の国学家である本居宣長が提起した文学理念である。本居宣長は自身の著書である『源氏物語玉の小櫛』（『源氏物語』の注釈書）において、「物のあわれ」という理念及び源氏物語においてそれがどのように体现されているかについて詳しい説明をしている。現代の言葉で言うならば、「物」は認識そして感知する対象、「あわれ」は認知そして感知する主体で、感情の主体はこの両者が互いに一致した時に生まれる調和のとれた美感であり、優美で、繊細で、もの静かで、直観的なものである。より直接的に言うならば、俗に言う率直さである。知っての通り、人の性格は自分が居る環境の影響を受ける。例えば普段寒い地域で生活している人はより勇敢で、高原地域で生活している人は考えることを苦手としている。日本の人々は災害が多い地域で生まれており、地震や津波などは度々目にしている他、昔からすでに自然条件が悪くて物に恵まれず、人々の生命は明日をも知れないと言われてきていたため、彼らの生命の盛衰に対する姿勢はとても落ち着いている。それはあたかもタゴールの「夏の花のように艶やかに生き、秋の枯葉のように穏やかに終わりを迎える」との理念のようであり、私たちが高台寺で交流した禅師もまた今を生きるとの概念を伝えていた。彼らは些細な事で過度に喜んだり悲しんだりせず、常に樂觀的姿勢を貫いている。これは日本における死の準備教育が成熟しており且つ魅力を有していることが原因だと思われる。そのため日本人は常に落ち着いているが、かしこまらずに感情をありのまま表現することもでき、笑いたい時には笑う。よって日本で生活している人は皆とても幸せそうに見えるが、実質的に彼らは様々な事柄と自身の感情に対し物のあわれとの観念が言うところのバランスを実現しており、そうした状態においては悩み続けるようなことは特にないと見受けられる。それと同時に人としての生来のあわれみから、人や物に対し多くの企業は環境保全や公益への奉仕との理念を普及しており、こうした点もまた日本国民の物のあわれの直接的な体现だと言える。

「隠忍」については、日本の歴史では常にまず耐え忍んで機会を待って力を蓄え、力が備わり時期が訪れた時に行動を起こすことが重視されてきた。現在においては、十分な準備をしてから着手する、また収穫を遅らせるといった

我慢強さがそれに当たり、中国の「所以動心忍性、曾益其所不能（天がその人の心を鍛え、忍耐力を増大させ、大任を負わせるに足る人物に育て上げようとしている）」との文語文が言うところとほぼ同じであると言える。日本の人々の日常生活における隠忍については、自身の趣味と仕事の切り換えがはっきりしている点にあると思う。平日の昼間は地下鉄駅を通り忙しく走り回る一般の人が、夜になると自分を開放する。こうした点はまたサブカルチャーの発展やアルコール依存といった日本社会の現状につながっており、隠忍はそうした発散の種としてプレッシャーの下で懸命に育っている。

どのような国民性であれ、実際にその環境に身を置いて感じることでのみその民族の精神的中核部分を真に理解することができ、それは私たちが今まさに感じているものである。

大学名：中国石油大学

氏 名：齊琴

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

中国はかねてより「礼節を重んじる国」の呼び名があるが、私たちには確かに細部への注意が足りないところがある。例えば日本ではトイレに赤ちゃん用のベッドを設置している、点字ブロックの道路が真に役割を果たしている、スタッフがベビーカーや車椅子を押すのを手伝っている、ゲストが車でその場を離れる時はホストが相手の姿が見えなくなるまで笑顔で手を振りお別れをすることでゲストがホストの誠意を感じる、といった場面を目にした。こうしたマナーによる誠意を通じて日本人の中国人に対する好意を感じた以外にも、今回中国語が堪能な多くの日本人ひいては紅色歌曲（中国共産党を称える歌曲）を歌うことができる日本人との交流により、私は改めて中日両国の友好は現実的に存在していると感じることができた。両国の友好には互いの交流の強化が必要である。単に報道のみにより1つの国を知るのとは不十分であり、私たちはその身を通じて歩み寄り、感じ、知ることでより全体的且つ立体的にその国への理解を深めることができる。今回の活動で私は日本を感じ、日本を考え、日々異なる日本の姿を目にすることができたが、それと同時に日本人が本当の中国について感じられる機会が増えることを願っている。

「中日両国の友好交流の強化」といった言葉はこれまで何度も耳にしてきたが、今になってようやくその意義を理解することができた。交流の強化は政治的そして経済的な往来の強化である以上に、両国の人々の交流の強化であり、互いへの理解を高め、互いの本当の姿を理解することである。中日関係は数人の努力で変わるものではないため、より多くの人に中日友好の重要性を認識してもらえよう自分自身も微力を尽くしたいと思う。

大学名：中国石油大学

氏 名：蘇奕静

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

日本での8日間ではマナーが個人的に最も印象深かった。公共スペースは秩序が整然としていて、皆が左側を歩き、地下鉄やトイレを待つ際は自発的に列を作ること、ひしめき合ったり混乱したりすることがなく、日常生活では常に丁寧な言葉遣いをすると共に会釈やお辞儀などをする。公共スペースではほとんどの人が声のトーンを抑えて喋り、大きな声で騒ぐことはない。最も感動したのは私たちが訪問先を離れる際、スタッフが私たちの乗るバスまで見送り

に来てくれたことで、時に外で強風が吹いていたとしても彼らは私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってくれたなど、とても思いやりを感じた。ホームステイの2日間では、ホストファミリーもまたとても充実したスケジュールを組んでくれた。そして私の意向をととても尊重してくれた他、他に要望が無いか尋ねるなど常に私を気に掛けてくれた。

日本における今後ますます中国でニーズが高まる技術については、それ自体が将来的な傾向だと認識している。丸紅を見学した際、スタッフからは医療分野における人工知能 CT 技術の紹介があった。欧米人と日本人では体型の違いが大きいことからそうしたデータの適用は困難だが、中国人と日本人の体型は似ていて、ビッグデータも似ていることから関連の技術提携を中国と進めているとのことであった。中日両国は互いに素晴らしい隣国であると同時に切り離すことのできないパートナーであり、中国経済の更なる発展に伴い中日両国の提携はより緊密になると確信している。

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：張奕博

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

その国の未来は青少年を見れば分かり、青少年の未来は教育を見れば分かる。私たち訪日団は、日本滞在期間中に日本の有名大学である大阪大学と早稲田大学を訪れ交流を図ったが、早稲田大学の紹介及び日本社会における私立大学と学習塾文化を基に、私は両国の将来や国民性を最も表すことができる教育の問題について自分なりの見解を持つことができた。

早稲田大学を例にすると、同大学では申請制度を採用しており、毎年約 10 万人の申請を受けその中から約 1 万人を受け入れているなど合格率は 10% に達しており、トップレベルの大学でこれほどの合格率は大学入試を経験した中国の学生にとっては驚くべきものであった。また日本の電車では早稲田大学等の有名大学に合格するための対策を学ぶ学習塾の広告も多く見かけた。後に私は中日両国の教育に対する認識がもたらす違いについてホストファミリーに尋ね、詳細を知ることができた。

日本の学校教育は公立教育と私立教育に分かれており、その最も大きな違いは学費に表れている。次に公立教育は終始プロセス重視の教育とゆとり教育の理念を堅持しており、様々なカリキュラムの開設により学生の世界や学習の体験を強化することをモットーとしているが、科目が多く進度も遅く、また有名大学への入学基準を満たすことがほぼ困難になっている。そのため子どもの親は、もし子どもが一流大学に入学したいとの意思がある場合、幼い頃から私立の教育を受けさせるか、学習塾に通わせるしかないと認識している。私立教育は公立教育に比べ学費が高く、教育も緻密で、学生への要求が高いなど、学生の国立の名門大学への入学を後押しする他、私立の名門大学を受験する上での確かな基礎を提供している。

だがこうした公立・私立制度はより大きな不公平をもたらす恐れがある。公立教育における公平性を守るために皆が余分な支出により学習塾に通わせる或いは祖先の財産を使い私立に通わせるしかないとの状況は、日本社会における階級の固定化をより深刻なものにするのではないだろうか？ 対して中国の大学入試制度は常々、学生の個性を抑圧している、試験だけを得意とする視野の狭い学生を生み出しているといった批判を受けている。だが、中国の大学入試制度は学生らに相対的に公平な出世の道筋を示しており、そのため近頃の「負担軽減」については、本当に負担を減らしたのか、それとも公共教育を縮小したのかと私たちも疑問に思わざるを得ない。その他、学習塾に対する取締りにより相対的に安価な課外指導の資源が失われ、競争がこれまで以上に親世代の知識レベル及び高価な個人指導に依存する事態となることで、より大きな不公平が生まれるのではないかとこの点についても疑問であるが、良い方向に進むとの期待を胸に中日両国の教育実務のそれぞれの発展を見守るしかない。

教育以外に日本の集団帰属意識もまた私にとって印象深いものであった。特に松下幸之助氏に関し、同氏は経済危機に直面した際に資本の本質に相反する決定を下し、解雇をしないと約束や労働時間を半減すると同時に給与水準を維持するとの対策により困難な局面を乗り越えている。そしてこうした強い集団主義の精神によりパナソニックは様々な制約の中で一致団結して新たな発展を実現している。また多くの日本企業の従業員は30年ないしはより長い期間1つの企業で勤め上げることを厭わない。こうした点については企業に対する強い共感と集団帰属意識が必要であると言わざるを得ない。

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：李莫

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

4.日中間の交流

今回本当の意味で日本の企業そして日本の家庭と交流し、日本の産業モデルや経営戦略、そしてグローバル発展の手段や企業文化を理解し、さらに本場の日本の生活文化を体験することができた。今日までの探求学習において私たちは多くの企業を訪問したが、初日に JAL の便に乗り実際にその機内サービスや食事及び様々なコンテンツが楽しめるモニターを体験した時からすでに、私たちは日本を感じていたのかもしれない。

最初の訪問先は JAL で、今回は貴重な事に間近で格納庫内で整備をしている航空機を目にすることができた。解説や映像資料により私たちは JAL における最新の機体及び機体毎の外観的な違いについて知ることができた。それと同時に点検修理の時間については TACM の4つのタイプに分けられ、短いものから長いものの順であるなど、一部の専門用語についても学ぶことができた。

パナソニックミュージアムを見学した後の私の松下幸之助氏に関する感想については、1人の企業家、商人である以上に初心を忘れない店員であり従業員、またそれ以上に発明家そして職人であるとの言葉で表すことができる。工場の従業員であった当時22歳の同氏は強い決意の下で独立をすると同時に常に幅広い意識を持ち自社の経営方針を素早く調整そして公表し、34歳の時には綱領及びモットーを作成し、従業員を一致団結させ共に世界的経済恐慌を乗り越えた。そして38歳の時に事業部を設立し従業員としての精神の育成に力を入れ、その後海外において日本への貢献をすると同時に、中国の改革開放時期においても大きな支援を行うなど、世界に対し自身の貢献を果たしている。

またキヤノンの新たな時代における環境保全そして社会的責任との理念には目を見張るものがあつた。同社は最先端のカメラやレンズの研究開発そして経済効果を追求しているだけでなく、それ以上に社会的便益や環境便益の最大化実現を目指し、世界各地での自然保護区の建設や地球環境保護における4つの重点分野の構想を通じて、自然共生型社会の構築を目標に日々努めている。

その後の学生との交流では、私たちのグループは両国の大学生の違いをテーマに討論を行った。そしてカリキュラムや単位の状況、サークル活動、学生寮、両国において一般的な誤解など様々な話題を巡り議論を交わしたが、その中で私は日本の大学生の熱意や学問への真摯な姿勢を感じた他、さらに様々な学問を専攻する学生らとの交流では各自の役割分担により最終的に、私が起草し、人民大学の張さんと北京大学の何さんが日本語と英語で取材と記録をし、北京外国語大学の姜さんと大阪大学の学生が発表したグループとしての成果をまとめることができた。今回の探求学習を経て、私は将来的に中日両国における民間の友好交流に貢献したいとの理想や信念が今まで以上に固くそして明確なものとなった。帰国後も学んだことを整理また吸収し、今回得られた収穫の紹介を通じて中日両国における民間の友好を可能な限り発信すると同時に、自分自身を充実させ視野を広げたいと思う。

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：史子鑫

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

教科書では日本における同調論や集団帰属意識について少なからず示されているが、実際の日本社会において人々の生活習慣からその点について観察する機会はこれまでなかった。そうした中、今回の8日間の旅では日本を代表する京都、大阪、箱根、横浜そして首都の東京を巡る中で、テーブルマナーや歩行時の習慣またはライフスタイルを問わず、日本社会に存在する一種の暗黙の習慣やルールについて感じる事ができ、こうした点については外国人である私たちにとってはカルチャーショックと言えるものであった。

大阪の電車の車両内では誰も電話で話したり大声で騒いだりするようなことはなく、互いに一定のスペースを残し、公共の場における絶妙な距離感と調和が維持され、皆がそれを守っていた。そして中国人留学生との会話ではユニークな現象について知ることができた。夕方のラッシュ時に人がごった返す中でなぜ人々は食べながら歩かないのかに関して、その理由は皆がそうしないから自然とそうした現象も無くなったということを知り、これは単にマナーがもたらした影響ではないと私は思った。

ホームステイの際に私は好奇心から日本人はどうしてそんなに冷たい水を飲むのが好きなのかと訊ねたところ、洋一郎さんから彼自身は氷を入れた冷たい水を飲むのは好きではないが、皆が同じものを飲む必要がある場合があり、忘年会やパーティー、披露宴などの社交の場では皆が冷たい水を飲むため、もしそうした場で他のものを飲みたいたと言った場合は周りから浮いた感覚になるとの説明があった。

京都の昔ながらの文化そして京都の文化遺産の保存の良さもまた日本人の心の中にある集団帰属意識とは切り離せないものとなっている。京都においても六本木や原宿の若者のような奇抜な格好をして騒いだ場合、京都の公的機関から注意を受ける他、京都市民から白い目で見られるとのことで、正にこうした異端な存在への反対により京都の千年の古都としての独特の趣が保たれている。

日本ではごみ分類に関する厳しい要求の下、皆が道路上でむやみにごみを捨てることはなく、他者と同様に自らごみ袋を携帯し、また自分が出したごみが回収されず返却されることを一種の恥としている。これらはいずれも大和民族の強い集団主義の表れであり、単一民族の高い結束力によりこうした集団帰属意識が特に強いものになっているのかもしれない。それと同時にこうした点は日本が太平洋の片隅にありながらも世界の舞台で重要な役割そして影響力を発揮することができている秘訣だと言える。

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：劉宇晗

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

礼節があり身の程をわきまえていることから、中国はこれまで礼節を重んじる国と呼ばれてきた。そして一衣帯水の隣国である日本もまた礼儀で名を馳せている。今回の日本訪問で私は改めてその点について強く感じる事ができた。例えば京都での茶道体験では茶を点てる際の手順、茶を飲む際に茶碗を回す、飲み終える際に吸い切りをして音を立てるなど多くのマナーがある他、座禅体験では座禅の際の決まった姿勢があり、白檀の香を焚く、木魚を叩くといった一見煩雑なプロセスもまた実際には奥深い歴史文化における文明的な礼節を体現している。

また現代の日本社会における日本人のマナーにおいてもそうした点を感じる事ができた。日本はとてもマナーを重んじる国であることはかねてより耳にしていたが、今回の日本訪問では、例えばエスカレーターでは皆が左側に並

び右側の通路を空ける、日常の歩行や駅の階段の利用時も皆が自発的に片側を歩くなど、多くの点からマナーの良さを感じることができた。対して中国ではエスカレーターや階段において両側を歩く人が多い。こうした点を比較しても日本人のマナーの方が徹底していると言える。

さらに挨拶における礼儀に関して、日本人は人と会った際の礼儀をととても重視しており、一般的なものとしてはお辞儀でこれはすでに日本人のシンボルの動作となっている。通常、お辞儀の際の角度は30度から45度で、深くお辞儀するほど相手への敬意が示される。また挨拶の際は帽子を脱ぐ必要があり、帽子を被ったままだと軽率に見えてしまう。いずれにしても日常生活において日本人の振る舞いには礼節の2文字が体现されており、この点は私たちが学ぶべきものだと思う。礼節を重んじる国としては、文化や歴史における礼儀だけでなく、それ以上に生活におけるマナーに特に力を入れる必要がある。生活において適切なマナーを実現できてこそ私たちは本当の意味で素養を高めることができる。この点は今回の私たちの「収穫」である。

大学名：北京第二外国語学院

氏 名：馬碩

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

今回の訪日活動を通じて初めて日本を訪れ、日本社会を体感したことで私は日本の国民性及びマナーについて理解を深めることができた。

日本を訪れる以前における私の日本に対する印象は、人々が互いに礼儀正しく、お辞儀や敬語などを日本人は当たり前のように使うというものであった。確かに日本のサービス業では接客態度がとても丁寧である。例えば、ある晩に飲み物を買に出かけたがホテル内を探しても見当たらず、とある店員にどこで飲み物が買えるか尋ねたところ、彼も分からない様子だったが、最寄りのコンビニの場所を丁寧に調べて教えてくれた。この出来事からは日本人のサービス精神を見て取ることができた。食事においても入店そして食事を終え退店する際は店員がとても丁寧に歓迎と見送りをするので、お客さんに親近感を与えている。その他、これまでの印象とは異なるものとしては、日本では夫婦間でも礼儀正しいという文章を以前見たことがあり、それだと雰囲気がとても重苦しいのではないかと私は思ったが、ホームステイの際にホストファザーとホストマザーの関わり合いからは確かに礼儀が感じられたが、それは心地良さが感じられるもので、赤の他人である私ですらも距離感を感じなかった。しかし残念ながら、私が今回交流した人のほとんどが若者であり、年代毎の比較はできなかった。それでも1つの文化の形成には一定の継承が必要であり、今回の日本訪問では日本の国民性や文化の継承について理解できたと思う。企業での交流においては、各企業共に顧客利益を最優先にすると企業文化を有していた。パナソニックは国民のための偉大な思想を掲げており、また三井住友銀行も「ローンの前に顧客がそのお金を本当に必要としているのか？顧客がこの利息を負う必要はあるのか？こうすることが顧客にとって最も有益なのか？との点を明確にする」ことを念頭に顧客対応をしていることが分かった。

以上の点からは、日本人の礼儀正しさ、そして常に他人を思いやるとの一種の国民性を見て取ることができた。